



Title	「納屋は燃える」補遺-その「言い落とし」の「箇所をめぐって-
Author(s)	池内, 正直
Citation	明治大学教養論集, 418: (101)-(123)
URL	http://hdl.handle.net/10291/5276
Rights	
Issue Date	2007-03-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

「納屋は燃える」補遺

——その「言い落とし」の箇所等をめぐって——

池内 正直

はじめに

フォークナーの「納屋は燃える」(一九三九)は、この作家の旺盛な短編創作期に生まれた傑作群の、最後を飾る名品であり、それら傑作の集約的作品とも言っていいほど、この作家の魅力の最高のものが込められている。すなわち、第一に、肉親の情を取るか、社会の正義・公正を取るかの厳しい二律背反の原理に葛藤する少年の懊悩が描き出されているからであり、第二に、人間のおぞましさ、忌まわしき、邪悪さが酷薄に描きだされているからである。さらに第三に、プアー・ホワイト対富裕階級の対比が見事に語られている。それに、そもそもこの作品は、フォークナーの名声が確立しつつある時期に、彼自身が編集した『フォークナー短編小説集』(一九五五)の巻頭を飾る作品ともなったもので、作家のそれなりの自負の込められたものでもある。なお今日では、世界的な人気作家村上春樹の、そっくりのタイトルをもった短編「納屋を燃やす」(一九八三)との関連についても、興味絶えない作品でもある。

ただ、この作品については、筆者はかつて作品のもつ様ざまの側面を読み、なかでも相反する情と理に引き裂かれる少年を中心に考察を纏めたことがある。そこで本稿では、その際に述べ足りなかったり、その後気付いた何点かの問題について、補足的に記してみたい。特に、作中の語り手が「言い落とし」をして空白になっている箇所、つまり作者が、読者を「宙吊り」にしたまま放置している箇所について、読者の立場という特権を利用して、「補完」の試みをしてみたい。なおその前に、この作品の「読みどころ」について、（先の拙稿にいささか重なる部分があるかもしれないが）、煩瑣を厭わずまとめておきたい。

一 作品の概要、展開、読み処（Ⅰ）

作品はまず、父親の裁判が進行している田舎町の雑貨屋にいる一〇歳の少年サーティを、客観的な視点から語っていく。語り手の説く少年の内面に関する解説や、イタリック体の文で示される少年自身による思考の流れ、そしてさらに登場人物どうしが会話を交わす直接話法の場面等が、自在に入り混じりながら展開していく。なお、背景になっている時代は、「三〇年前に（五）」戦争が終わった一八九五年ごろである（以下、作品からの引用はヴィンテジ版『ウィリアム・フォークナー短編集』による）。

そのストーリーの骨子は、度々の納屋への放火で訴訟されている父親アブが今また土地を追われ、一家は一〇何回めかの引越しをする。父親はその日証言台に呼ばれた息子サーティが、正直な（しかし彼自身には不利な）証言をする年令に至ったことを知る。彼は新しい地主のド・スペイン少佐の家にも息子を同行させ、その白い豪邸と、彼が故意に踏んだ馬糞のついた靴で邸の絨毯を汚すありさまを見せつける。

少佐に絨毯の洗濯を求められたアブは、それを却って台無しにしたため、秋のトウモロコシの収穫のなかから損害補償を求める訴訟を起される。判決は少佐の要求をかなり軽減したものではあったが、アブは少佐の納屋に放火の用意をする。それを察したサーティは、少佐の邸宅に走りそれを告げ、父親は燃え上がる納屋を背に撃たれる。少年は一人で丘の上で朝を迎え、そのまま森のなかへ入って行くシーンで物語は閉じられる。

一、一 人間の邪悪さ—アブ・スノーブスという男

この作品は、サーティ・スノーブス少年が、父親の束縛から自由になるまでの葛藤と成長の物語として読まれることが多い。この類いの主題をもった文学作品は少なくないが、この作品にその問題やフォークナーらしさを見出すのも、興味深く意義は大きい。だが、「納屋は燃える」のもっと大きな驚嘆と感動は、むしろ父親の忌まわしい意地の悪さ、人間性の悪辣さにあるのではないだろうか。この人物ほど悪意に満ちた残忍な人間は、世界の文学のなかにもそうザラにはいない。だとすれば、ここで、彼の関わった幾つかの事件の實際を記しておく価値はあるだろう。

(イ) ブタの放置事件と納屋への放火

アブの飼っているブタがハリス氏のトウモロコシ畑に侵入した。氏は一度目には黙って返した。だが二度目にはアブに柵を造る針金を与え、三度目には捕まえておいて飼育代として一ドル請求した。すると見知らぬ黒人が金を持参して、「あの旦那ったら、お前さんの薪と干草が燃えますよって言っとけってさ(四)」と言い残して去る。果たして納屋を焼かれたハリス氏は、訴訟を起し、息子のサーティを証人に立てようとする。状況からすればアブの有罪は明らかだが、判事は子どもに問い糺すようなことは潔しとせず、アブを無罪にし、その代わり町からの追放を告げる。

アブは自分の所有する生き物が、他人の土地を荒らしても、また他人の親切を受けても、何の感情も抱かない男である。語り手は「血のなかに、自分の物以外の物への生れつき貪欲な浪費癖(七)」をもった男と言っている。実際に、彼は他人の物でも我が物と同然、勝手放題と考える利己的な男である。それでいて、たった一ドルの賠償を求められると、相手の納屋に火を放つという破壊的な男。なお(納屋)は農業の核になるもの、(家畜、穀物、道具)を収納する場所だから、これを燃やすことは、「農業世界に対する最大の侮辱的暴挙(タウンナー&キャロサーズ、六)」である。彼はそのようにして、一〇回以上も他人の財産を焼尽するという非道を犯してきているのである。

アブは、その裁判で証言に立たされたサーテイに「キサマはタレこむとこだった。あの野郎にタレこんでいたかも知れねえ」、「キサマは大人になり始めてやがる。…手前えの血を大事にしなきゃいけねえってことを習っとかなきゃあいけねえ(八)」と言って、息子の顔を平手で「冷ややかにきつく」殴るといった横暴な父親である。判事のハートウォーミングな判断も、妻の訴えも一顧だにしない、血の通った温かさなど微塵もない人間である。

(口) 南北戦争での略奪、横領

アブは、四年間戦場にいたが、語り手によれば「軍服もなく、誰の権威も、どの軍の力も、どんな軍旗の威力も認めず、忠誠心ももたず、…ただ略奪品のみを目的として戦場に赴いた(二四―五)」男であった。家族さえ愛せない男だから当然とは言え、祖国や軍に対する愛や尊重の思いなど一抹も、もちあわせていない。ただひたすら物欲のために、国も人の心も踏みにじり、何の躊躇なく裏切っていく男である。戦争の愚かさを批判した『キャッチ22』(ジョセフ・ヘラー)のなかの、兵士とは言いかねるような兵士たちなど、たとえ滑稽ではあっても、ここまで悪辣ではない。

(ハ) ド・スペイン少佐邸、絨毯事件

彼は、「あしたから八カ月の間俺の体と魂をこき使う野郎にアイサツ(九)」に行く道中で、「歩幅をわずか変えるだけで、踏まずに済んだはず(一〇)」の新しい馬糞の山をわざと踏んづけてから、ド・スペイン屋敷に入る。召使いの「白人さま、お入んなさる前えに足を拭いておくんなすって下せえまし。それに少佐さまはちよっくらお留守をいたしておりますんで(一一)」という訴えなど完全に無視して、馬糞の汚れがなお一層強く余計に残るように、「体重を二倍かけた」歩き方で邸内を歩く。

夫人が「信じ難い驚きで金色の絨毯の上の汚れの跡を見つめ」ながら、「お帰りくださいませ」という哀願も無視する。彼には、南部の男たちが格別に強くもつ、レディーに対する敬意や〈サザン・ベル〉に対する憧れなど一切無い。ただ無言で、「同じようにわざとらしい動き方で身体の向きを変え…玄関の階段の端で、初めて靴を拭うのだった(一二)」。人間が、何の恨みもない人に対して、ここまで意地悪になれるものかと、感嘆しないではいられない。

もっとも、絨毯を洗っている娘たちが言うとおり、「フランスからわざわざ買ってくれえ大えしたなものなら、あたいたったら土足で踏み込むみてえなところに置いとくなんてまっぴらだわ(一三)」と言うのは、アブの家族の側にとっては正しい論理である。また語り手は、アブの烈しい言動について次のように述べている。

彼の狼のような独立心と勇氣とさえ言えるものには、利害関係の無い第三者には強烈な印象を与える何かがあった。人々はこの男の内に潜む獍猛な激烈さを見ていると、頼りがいといったものよりも、自分の行為の正当性に対する激烈な信念から、利害を共有する者に対してまで利益をもたらしにくれるんじゃないかと、感じさせるようなものがあったようだ。

(七)

しかし、わざわざ故意に糞を踏んで、その足で屋敷の絨毯を踏んづけるなどという、不潔で汚い行為を敢えて行うなどというのは、決して「独立心と勇氣」を備えた人物の所業ではない。ただ悪意や敵意や憎悪の塊のような人物の仕業である。

(二) 絨毯破損裁判の判決に対して

絨毯を洗濯し結局それを破損したことに對してド・スペインは、絨毯は一〇〇ドルの品物なので、秋に収獲するトウモロコシから一〇ドル分(二〇ブッシェル)の損害賠償を請求する。だが、判決は一〇ブッシェル(五ドル分)に減額される。普通の人間なら、その程度の賠償で済むのなら、御の字である。判事の言うとおり、「ド・スペイン少佐が金を支払いなすったお品の消耗代として九五ドルの我慢をなさるんなら、お前さんもまだ手にしたらん金の内から五ドルの稼ぎの不足に我慢もできようぞ(一八)」という論はまったく妥当で、文学史に残る(名裁き)とさえ言つてよい。

アブは判決のあと、街で息子らと平安を装ったのんびりした時間を過ごし、ひとたび夜になると、「凍れる獍猛さで(二二)」大佐の納屋への放火の用意に取りかかる。まるで、『忠臣蔵』の大石内蔵助はだしの裏と表の様相である。そしてサートイを家に閉じ込めて、出かけるのである。アブの内面では、判決の常識的な正当性を受け入れることができない。そればかりか、その恨みを晴らすのに、賠償金の何倍もの資産を焼き尽くすことで報いようとする。

(ホ) アブの習性——総括

このように、アブは習慣的に、まず自分から相手の恨みを買うような意地の悪い所業をなす。次に相手の訴訟をそそる。続く裁判では、妥当で時には温情のある判決が下る。そして、彼はそれを拒否する。最後に彼は、相手の納屋を燃

やして最初に与えた損害以上の被害を相手に与える（また放火に関わる裁判によって、その土地を離れさせられる）。彼はこれで「引越しを一二回以上も（六）」繰り返すという懲りない人間である。何重にも計算された悪事の実行者、と言うよりも、殆どサデイズティックで且つマゾヒスティックな本能の塊りと言いたいくらいである。

こうしてアブは、諸家の論に示されているように、（一）足に傷があるところはアキレスであり、（二）火にこだわるところはプロメテウスであり、（三）悪意の塊りという点ではシェイクスピアのイアーゴウである。（四）黒い服を着て長い爪を生やしているあたりは悪魔のイメージであり、（五）壮大な野心をもつという点ではメルヴィルのエイハブや、フィツジェラルドのギャツビーに並ぶ。換言すれば、これら文芸史上の巨大な人間像、悪人像のすべてを総合したような、比類なきブラック・イメージをもった人間像なのである。

フォークナーのほかの作品との関連で言えば、ポパイ（『サンクチュアリ』）やクリスマス（『八月の光』）のような横暴なイメージをもち、サトペン（『アブサロム、アブサロム！』）のように獐猛な自己中心的主義者である。この作品では、アブのもう一人の息子でサーティの兄の名前は明らかにされてはいないが、他の諸作品との関連を考慮すれば、その少年の名はフレムである。そして確かにアブは、他の作品のなかのフレム・スノープスの父親として十分に相応しい狡猾さ、利己主義、我利我利者ぶりをもっている。しかし、憎悪心の激しさという点では、フレム以上である。短編小説と言う限られた枠のなかで、これだけ残酷な人物像が造られたという意味でも、「納屋は燃える」は傑出した作品である。

一、二 アブ・スノープスを生んだ時代背景

アブは、（目には目を）、（他人はみな敵）という思考をする男である。この作品が書かれた一九三〇年代という時期

は、大恐慌や、スタインベックの『怒りの葡萄』(一九三九)にも描かれている年来の大砂嵐で、アブのような小作農の暮らしは極めて苦しいものだった。^③〈裕福な白人の俗物性に対する貧困層の白人が抱く怒り〉は一九二〇年代以降に顕著になり、フォークナーの『死の床に横たわりて』の人物たちにも投影しているとされているが(ワドリントン、九二一九七)、その特色は、このアブには一層鮮明に見られる。

また一九三〇年代初めには、南部を中心にアメリカを震撼させた政治家ヒューイ・ロングが唱えた「富の独占が諸悪の根源という陰謀理論すれすれの階級対立意識(三宅昭良、一一一)」が、広く流布していた。これが、アブのようなブアー・ホワイトの、金持ちに対する烈しい憎悪心に影を落としていたということもあるだろう。

もっともこの作品の時代背景は、一九世紀末期である。すなわち、工業化、都市化の時代、資本主義が花開こうとしていた時代のことである。輝かしい未来という光と、それに付随する暗い影の時代が来ようとしていた。南部のフォークナーの世界にも、時流に乗ってのし上がるフレムのような人物には、絶好のチャンスが来ようとしていた。反面では、一方でクエンティンのようなインテリや古い名門の一族にとっては、かけがえの無い〈時間の蓄積〉が破壊され、他方で貧しい者は一層の窮乏へと陥るといふ、不幸な時代が忍び寄って来ていた。フォークナーの諸作品は、今日のアメリカの歴然とした格差社会の、最初の兆しが現れてきた時代の断面を切り取ったものと言ってもいいだろう。

その間であって、アブはこの烈しい時代の流れの恩寵を受けることのできなかつたもう一人の男である。働く土地を求め一家を引き連れて荷馬車で放浪を続けている貧乏人。たまに町に出たときには「収穫や家畜のことや、…博労をしていたころのことを語り合っている(一九)」と説かれてはいるが、時代の流れからは完全に取り残された暮らしぶりである。そんな彼が、裕福な者たちに対する僻みや怒りを抱くのも極めて自然なことだったであろう。憎悪と悪の権化、アブ・スノップスの誕生は、(一九三〇年代を遙かな背景として)アメリカの資本主義化の時代という事態が影に陽に

作用している。納屋への放火は、富裕階級に対するアブのような貧民の抗議形式として、「南北戦争後に顕著になったものだった（モアランド、十七）」というのも、納得のいくことである。

二 少年は成長したか？—サーティ・スノープス

二、一 サーティ——苦悩する少年

アブがどんなワルであっても、サーティにとっては父親であり、その「血の牽引」に抗えない。親の犯した放火に対する証言を求められると、「父つあんはおいらにウソをつかせようとしてる」と思い、「悲しみと絶望感を抱きながら、おいらあそうしなくっちゃなんねえ（四）」と思いつつながら、沈黙の何秒間かを過ごす。彼のその刻々の思いを、語り手は次のように説明する。

満員の小さな部屋には人々の静かで聞き耳をたてているような呼吸音以外には何も聞こえず、彼は崖っぷちの上で葡萄の蔓の端につかまって舞い上がり、その天空の辺りで無重力状態の時間のなかで引力に抗って留まっていた。

(五)

逃げ場も何も無い、息詰まるような苦しさを的確に語った名表現である。

父親はその夜、息子が大人になり独自の判断で動くべきかどうかのあわいに揺れている気配を察して言う。「お前えは大人になりかけとる。だから知っとかなけりゃあいけねえこたあこいうことだ。つまり、世間じゃあ味方はお前えの

身内だけしかいねえ。だから、そいつを大事にしなくっちゃいけねえってことじゃ(八)」と。この父親は、子どもにもう一つの大事なこと、つまり「社会」と「正義や公正」を教えることのできない、父性失格の人物なのである。

その日の朝までのサーティイは、簡易裁判の行われている店で、第一にチーズと缶詰の「ラベルを彼の腹が読み、…内臓が確かに嗅いだと思った密閉された肉の匂い」を感じ、第二に「大きな絶望と悲しみ、昔ながらの烈しい血の牽引ゆえのいささかの恐怖」の匂いを感じながら、訴訟人のハリス氏を「お父っあんの敵、おれらの敵(三)」と見ていた。五感の感覚も未発達(あるいは混乱を処理できない)少年であり、血縁に支配され世間を知らぬ子どもであった。だがこのときから、サーティイには、血縁の牽引と人道や正義の牽引との相克に引き裂かれる苦悩が始まる。

二、二 苦悩からの解放?

ド・スペイン少佐の豪邸を見る経験は、サーティイにまた新たな感動を与えた。正義・公正の象徴の「裁判所のような屋敷」を見る少年に去来する思いを、語り手は直接話法(イタリック体)に切り替えて、次のように伝える。

このお屋敷の衆なら大え丈夫だ。こんな静かででっけえうちのなかにいる人なら父っあんの手にゃあ届かねえ。父っあんじゃないがブンブン言ってるみてえなもんさ。…静かででっけえもんの魔法のおかげで、ここんちの納屋も厩も小屋も父っあんが点ける小ちええ火なんぞに負けっこねえやな

(一〇)

彼はさらに、「そうよ、父っつあんだってそう感じるさ。この家は父っあんでえ人を、どうしようもねえくれえ昔からそういう人にしてたのを、今度ちよっくら変えておくれかも知れねえ(一一)」という、甘美な期待すら抱く。なお、

サーティが白い屋敷を見てこのような期待を抱くにいたった背後には、南部のプランテーションションが「倫理的、経済的な祝福の源泉である」という、アメリカ南部の〈神話〉に依拠しているところもある。もっともこの富の象徴は、黒人と、ブアー・ホワイトの汗の結晶であるというもう一つの神話も存在していたのだが（モアランド、一三）。

しかし、アブ・スノープスは、息子が期待しているような甘い男ではない。ここから前述のとおり、馬糞を踏んで、屋敷の高級絨毯を存分に汚し、洗濯の要求もい加減にあしらひ、温情判決を無視して、その夜「馬車に差すオイルをもって来い（二二）」とサーティに命じる。少年は、そのまま「うしろなんか見ねえで駆けて行っちゃまって、父つあん顔なんか見ねえですむことだっただけでできねえこたあねえ。だけど、できねえ、できねえ（二二）」と、この時点にいたるまで、「昔ながらの癖、昔ながらの血、彼が自分から選ぶことは許されなかったもの（二二）」に駆られている。

二、三 血（父）か公正（放火の通報）か

ただ、この放火を前にして、彼も父親もそれ以前の父子の様子とは大分異なっている。その点について、まずサーティが言う。「黒人を使いに行りなさらねえので？だっけ今までだったら、前もって使いを出しなすったのにさ（二二）」。しかも、このようなことを口にしても、「今回は彼の親父は殴らなかつた（二二）」。そしてアブは、サーティを母親の腕のなかに委ねて、上の息子と二人だけで出かけて行く。語り手も、作者も、この父親の異変については何も説明していない。この作家がよくする（作品の魅力を高める）「言い落とし」の一つである（これについては、のちの「四 読みの愉しみ——「納屋は燃える」の〈言い落とし〉」の項で検討したい）。

サーティが母親の腕をすり抜けるのは簡単なことで（アブが、なぜこんな容易で見え見えの拘束をしたかということについては、「四 …」で述べたい）、彼はド・スペイン邸に突っ走り、「納屋があー！」と言い置くと、次の瞬間には、

「車寄せを走り、血流も息も吼えるなかを道に出て(二三―四)」走る。少佐の馬が殆ど頭上を駆けぬけ、銃声が三発聞こえてくる。ここでサーティは初めて走るのを止め「父っあん！父っあん！(二四)」と言い、再度走りながら「父さん！父さん！」と喘ぎながらすすり泣く。

こんな彼の姿には、一方で正義につき、同時に他方で血の牽引の方向に向かうダイナミズムが最後まで葛藤していることを見てとることができる。だが、一方の父たちが死んだ様子は明らかである(語り手は例によって何の結末も言わないが)。その認識は、彼を変えるはずである。最後に父親の撃たれた方向に向かって、それまでの子ども呼び方「とっっあん(Papa)」ではなく、大人の呼びかけ方の「父さん(Father)」となつているところにも、彼の変化のありさまが明確に示されている。

二、四 留保される大人への成長

その後の彼は、「真夜中、丘の上に座り…四日の間家と呼んだものを背にして、顔はこれから入っていく森に向けて、…もはや恐れや恐怖ではなく悲しみと絶望でしかない悲哀と落胆に包まれて」いる。彼は、今までの彼とはまったく変わろうとしている。しかも内心では彼は「父さんは勇敢だった。…勇敢だった。戦争に行つて来た。サートリス大佐の連隊の兵隊だった(二四)」と、いう誇りを支えにして大人になろうとしている。だが、語り手は、父親が勇敢な兵士どころか、実際は南北両軍から略奪品を稼いでいた、小ずるい男に過ぎなかったことを銘記している。しかも何の説明もなく(二四―五)。いったいこれは、語り手の単なる意地悪な所作なのだろうか。

確かにこのこと、すなわちサーティが父の姿を見抜けないことは、彼がまだ未熟で甘い少年であることを示す。それによって、作品に一層のリアリティーが与えられる。だが、そのことを知らないことは、少年にとっては却って幸

福なことでもある。少年の健全な成長のためには、父親は狡猾な人物であったという事実を知るよりも、英雄だったというフィクションを信じ続ける方が、はるかに有効である。そして語り手は、そんな少年の頭上で、「天空がゆっくりと回転し」、「間もなく太陽の昇るころ」、彼が立ち上がる場面を美しく語って作品を閉じる。

彼は丘をくだって小暗い森に入っていた。その中では鳥たちの水銀の啼き声呼び交し止むことがなかった——行く春の夜のとほきめき焦がれる心の速く熱い鼓動のようだった。少年はうしろを振り返らなかった。(二五)

この語り手は、物語を生きること、あるいはロマンを生きることが、人間の大成の基本であるところを、見事にまた温かく、そしていささかの皮肉を込めて、語っているのであろう。

二、五 サーチィ、退場

サーチィ・スノープスという人物について興味深いことは、この作品のあとすっかり姿を消してしまう点である。『村』の第一章で、語り手のラトリフが〈納屋が燃やされる物語〉を語り、彼のこと一言触れるだけである。すなわち、フレムの名前を出して、「奴には弟が一人いて、わたし一度どっかで会ったこともありませぬ。だが奴さんは一家の連中とは一緒じゃござんせんでしたよ。とにかく最近見たときにゃあ一緒じゃござんせんでした。ことによっちゃあ連中がねぐらを抜け出して行くとき、そのことを奴さんにゃあ言いそねたんでござんすかね(一二三)」と。彼はその後のスノープス三部作(『村』のほか、『町』、『館』)あるいは他の諸作品に戻ってこない。

これは、フォークナーの主要な作中人物のなかで、特にスノープス一族の者としては、例外的なことである。これは、

彼のように、あわよくば社会的公正の方向に向かつて走り出そうとするような人物は、フレム・スノープスを中心に展開する、非情で無慈悲な人物群像の物語にそぐわなかったからなのだろうか。作家の創造力を十分には刺激し得なかったからだったのだろうか。このように肯定され、許容されている人物であっては、作家のこだわりを引き止めておくキャラクターではあり得なかったのだろうか。

三 その他の人物について

三、一 背景的人物

語り手は父親と息子の関係に焦点を当てており、その他の人物群への関心は薄い。一家の者でも、兄については名前すら述べられていない。母もアブの横暴の前でおろおろしているばかりで、本来の母として一家の太陽であり得ていない。結婚の喜びの記念に持参した時計も「死んで忘れられた日の時刻の二時一四分を指したまま止まっている(六)」。少年の叔母も姉たちも存在感が薄い。だが、そこはフォークナー、姉たちが「煮えたぎる洗濯用の鍋の傍らで、深い倦怠感に浸りながら嫌々絨毯にかがみこんでいる(一三)」姿は、『マクベス』の冒頭のシーンにも並ぶ(ヴォルピー、二三五)、味わいをかもし出している。

治安判事たちもその場にいる人々も、その場面の背景的な人物としてそれぞれ有効に仕立てられている。ド・スペイン夫妻も、スノープス親子の引き立て役として適役だろう。この邸の召使の黒人も、『アブサロム』のサトペン屋敷の玄関に立っていた黒人の「修正再生版」という点でも(モアランド、八)、意味が大きい。

三、二 語り手

語り手はストーリーの進行を三人称的な立場から語ったり、人物の言動を直接話法的に導入したりするといった、通常の舞台廻しの役割は十分に果たしている。また、様々の人物の内面の動きや事象についての説明も適宜行っている。ただこの作品の語り手の特異な点は、サーティ少年の思いを説明するとき、彼の「現在」の思いばかりでなく「未来」の思考まで説明していることである。たとえば、一家が野宿の夜に燃やす火が「小さくて、こじんまりした始どけくさい」ことに関して、こんなふう語る。

もっと大きかったら、「サーティ」はなぜ大きな火にしないのかと思ひ、一歩進んでそれはあの戦争中に森のなかで兵士たちから隠れて送った四年間の夜々の今に生きる結果と思つただろう。：そしてさらに年長になつていたら、別の理由に思い至つたであろう。すなわち火の元素は父親の完全性を維持するための一つの武器として、己の存在の源泉に触れてくるものがあつたのだと。

(七一八)

この強腕とも言える語りの展開により、サーティの成長の過程とそれに伴う思考力の変化と進歩のありさまが説明される。また少年の「現在」の限られた思考と事実とのギャップが、期せずして滑稽味を添えることになる。そして前述のとおり、少年の健全な成長ぶりを温かく見ていこうとする、ハートウォーミングな観点を示しているのもあつた。

三 「納屋は燃える」の読み処(Ⅱ)

三、一 作品の様々の主題

『ウイリアム・フォークナーの短編小説への読者案内』の著者ジョーンズは、「納屋は燃える」の主題に関する諸家の様々の論を紹介したのち、本作品が「フォークナーの全作品に盛り込まれている問題をトータルに含んでいるため、もっとも人気のある作品の一つになっている」と述べている(一七)。そこに挙げられた主題の主なもの、以下のとおりである。すなわち、父と子の主題、イニシエーションの主題、孤立する個人、家、家族への忠誠、階級の対立や憎悪、共同体の墮落、他の作品にも用いられた話題の再使用、屋敷、建物の意味、子どもの視点、壊れた時計、傷ついた足、死亡の如何に関する曖昧さ等。

なおまた、右の主題の多くのものと重なるもう一つの主題―相反する二つの真実への節操という問題も大きな比重を占めている。つまり先にサーティに関連して触れた、個人的愛情 vs. 社会的公正の葛藤や、サーティの選択の問題などである。ここでは、それら主題の問題から転じて、「読みの愉しみ」と言う観点から、いささかテキスト外の問題について暫く拘ってみることにしよう。

三、二 村上春樹版「納屋を焼く」との比較

村上春樹のこの短編小説(一九八三)のなかには、フォークナーの本を読んでいる人物がいる。そのことからしても、作者がこの作品にタイトルを付けたとき、フォークナーのこの短編のことが念頭にあったことは確かだろう。一体、村

上春樹は自分の作品のタイトルにどのような意味を仕掛けたのだろうか（それとも、このような問いの立て方には余り意味がないのだろうか。ちなみに、佐野眞一の『響きと怒り』（二〇〇五）は、フォークナーの同名の作品を十分に踏まえたドキュメント作品である）。

村上春樹版のストーリーを簡単にまとめれば、語り手の僕は、パントマイムを学んでいる女性と知り合う。彼女の恋人は納屋を焼くのが趣味の青年で、僕と会った日も「その下調べに来た」という。以後僕は近所の納屋をコースに入れてジョギングをするが何事も起こらない。その後彼に会ったので納屋のことを聞くと、彼は「焼いた」と言う。一方彼女に電話をするが連絡がとれないまま。フォークナーの作品とは、ストーリーの内容がまったく違うし、人物の言動の意味もよく分らない。

両作家の作品が大きく違うのは、まず（一）村上作品では納屋は実際に焼かれていないが、フォークナー作品では既に一〇件以上も焼かれ、作中の語りのなかでも実際に焼かれている。また納屋焼くことが（二）一方は趣味で、他方は抗議、復讐の手段であること、さらに人物間の葛藤が（三）村上作品には殆ど無いことに対して、フォークナー作品には苛烈なものがある。両作品には、〈納屋を焼く〉という言葉以外には、共通するものが殆どない。村上作品にはそもそも納屋を焼く行為もなければ、ドラマらしいドラマもない。

この村上作品に関する評論のなかには、まず納屋を焼く趣味をもった男とは、仕事もフィクション的な設定だし恋人も共有することから、僕の「分身」であると分析しているものがある。その僕が、納屋を焼くという行為をパントマイムしている。つまり僕が、〈悪〉をフィクションの世界だけで行っている物語である、と読んでいる（酒井英行）。

加藤典洋は『テキストから遠く離れて』のなかで、納屋を焼くとは、男が女をレイプをして殺している話と読むことが可能であると述べながら、むしろこの作品にある「〈無いこと〉がここにある」という感触（一六四）の怖さについて

論じている。この〈無いことがある〉ことの恐ろしさについては、たとえば次のような例における雲泥の差を思い浮かべてみればよい。すなわち、恋人が始めから〈無い〉ということと、恋人がかつてはあったが今は無い、つまり〈無いことがある〉という大きな空虚との違いの大きさを考えてみればよい。

この加藤論を踏まえて、今村楯夫は、当の村上の作品の前後の作品、『羊をめぐる冒険』(一九八二)と『ダンス・ダンス・ダンス』(一九八八)のなかの女性失踪事件のコンテクストから、〈納屋を焼く〉ことが、女性を殺すことのメタファーであり、犯罪を犯す青年を語り手「僕」の分身と読んでいる。そして、フォークナーの少年の父親殺しに対して、村上春樹の反社会的な行為によって自己の存在を知る無力な男たちの系譜を示すものと読んでいる。これは、インタビューテクスチュアリティによって、読みを深め説得力をもった分析と言っていだろうか。

ただ、この解釈と酒井論と加藤論を並べたとき、〈納屋を焼く〉という表現の謎を、もう一つの行為のメタファーとして解釈しきってしまう読みよりも、〈無いということがある〉ということの怖さが描かれているという読みの方が興行きのある読み方として、とっておきたい。そしてその方が、曖昧を曖昧に放置し、読者を宙吊りにする村上春樹らしい作風なのではないだろうか。

一方フォークナーでは、納屋を焼く、すなわち人々のもっとも大事な物を焼尽することそのものの怖さと、それに付随してその行為をする人物や周囲の人々の憎悪や苦悩が、毒々しい色合いで描かれている。悪を行う人物の息子が、肉親の父と社会正義に股裂きに会っているありさまも描かれる。この作品には、このように様々の恐ろしさが実際にある。そこで、両方の作品の関連を強引にまとめれば、一方(村上作品)では悪のネガの面が、他方(フォークナー作品)はそのポジの部分⁶⁾が、それぞれ存分に描かれていると考えることができるのである。

四 もう一つの読みの愉しみ——「納屋は燃える」の〈言い落とし〉

四、一 銃砲の音のあと、アブはどうなったか

フォークナーの他の多くの作品同様に、この作品にも、分らないことや「言い落とし」と思われる箇所が散見される。それらのうち、もっとも多くの議論を呼んでいるものは、アブ・スノープスと長男のその後はどうなったかということだろう（キャロルズ、二一九—二〇）。ただこの点については、「あの夕日」のナンシーのその後の場合とは大いに異なる。状況からしても、ド・スペインが銃を三発も放って撃ち外すはずがない。ここは、結末は明らかだがそれは敢えて書かなかただけの、たとえば『八月の光』のクリスマスが義父を殴りつけ（て殺害し）た場面のような、フォークナーのよくする手法の一つと考えてよい。

四、二 放火の夜—サーティ母の腕の高速に委ねられたのはなぜ？

次に、アブが放火をするために出かける前に、サーティを母親の腕のなかに委ねたのはなぜかということも話題の一つである。少年を拘束しておくためなら、ベッドに縛りつけておく方がよかつたはずである。これについては、父親アブは息子に対して、他の場面で（一）社会経済学の訓え（豪邸は働く者の汗）、（二）勇気の訓え（ド・スペイン事件）を示したと同様に、もう一度教育的でありたかつたという、ずいぶんアブ最良の解釈をする人もある。この場面の教育とは、（三）心理的拘束という訓えである（ゼンダー、三一九—三七）。

だが、この場面のアブは、息子が大人になっていることを承知していた。彼が、このときに限って黒人の伝令も使わ

せないことを訊いても、「今回は、父は息子を殴らなかつた(二二)」くらいだから。だからこのときのアブは、彼を強引に拘束する代わりに、息子が独自に選択するように、放置したのだろう。すなわち、父親はゼンダーの説く「真理的拘束」を超えて、「選択をさせた」のである。だとすれば、サーティが直面した選択とは、月並みの成人儀式としての選択ではない。今までになく父親から解放され、自分個人に委ねられた初めての選択である。それゆえたった一人きりの孤独で辛い選択だったのである。そのあとで、彼が大人になるといふのも、けだし自然のことだろう。

四、三 もう一箇所の大きな「言い落とし」

作品の始めの方で、語り手が故意に「言い落とし」場面¹に次のようなところがある。裁判が終わつたあと治安判事が、アブに忠告して「この土地を離れなすつて二度と戻つて来なさるな」と言うと、アブは冷ややかで粗っぽく抑揚も強弱もない声で次のように言う。

「あっしゃあ、はなからその気でさあ。こんな臭え土地なんぞにいたくでもねえでさ。面(つら)なんか見たくてもねえらつちもねえ連中が……」彼は特に誰に向かって言つたというわけではないが、活字にはできないような忌まわしいことを言つた。

(傍線引用者、五)

右の点線(すなわち「」連中が……)の箇所では「活字には出来ないような忌まわしいことを言つた」はずだが、それは、いったいどのような言葉なのだろうか。語り手は、それを確かに耳に入れたはずだが、いっさい語ろうとしない。ここで、読者は敢えて(一種の遊びとして)語り手に挑戦して、その箇所を補つてみることも面白いだろう。たとえば、次

のような〈補完〉はいかがであらうか。

(イ) いちんちじゅう畑で這いつくばってるしか能のねえ奴らで、後たあメシ食ってクソして寝るだけのどん百姓の奴らとなんか（一緒にいられるもんか）。

(ロ) あっしら真面目に働く衆から骨の髄まで搾り取りやがって、血も涙もねえ、神も仏も知らねえバチ当りのクソ野郎、ウジ虫野郎に腸チビス野郎の村なんぞに（いたくでもねえ）。

(ハ) （手めえらみてえに）食って、呑んで、女を抱くことのほかにゃあ楽しみみてえもんも知らねえバカな田舎者だらけの（こんなとこにいられっこねえ）。

(ニ) ひとの切なさも分からねえで、手めえだけイイ思いをしてやがる奴らなんかのツラなぞ、二度と見たくでもねえ。

(ホ) 「そのほかにもいろいろあるだろう。ここは、本稿の読者の方々にお考え願いたい」
アブの性格からすれば、おそらく（イ）か（ハ）あたりが、最も近いように思われるのがいかがだろうか。

おわりに

「納屋は燃える」も他のフォークナー作品同様に、人間の生きる姿の凄まじさを見せてくれるものであった。ここでは、アブ・スノープスの悪辣さが圧倒的なパワーで迫ってくる。そんな親であっても、最期まで離れることのできない、息子のサーティイの心情も哀れが深い。またそんな家長に率いられて一〇何回も引越して放浪する一家も哀れである。この作品にはアブ・ホワイトの考え方や生活の一部始終が、繰り返し何重にも密度濃く語られている。その間に、フォー

クナーの作品共通の「言い落とし」や謎も織り込んで、ますます興味深く、面白い作品になってきているのである。

本稿では、そのアブの悪の凄まじさと息子の選択のありさまについて、改めて注意を促すことができたのではないだろうか。またさらに、この作品でも、作者が故意に「曖昧」に「言い落とし」て、読者を「宙吊り」にしている箇所の数々について、作品の面白さを増幅する〈補完〉を試みることはできないだろうか。

注

- (1) 拙稿「サーティ——少年の挫折——フォークナーの“Barn Burning”について」『明治大学教養論集』通巻三二〇号（一九九八年三月）。
- (2) この「補完」に関連しては、拙稿「フォークナーと現代文学」〔明治大学教養論集』通巻四一四号（二〇〇七年一月）を参照されたい。
- (3) スタインベックの『The Grapes of Wrath』の第二章の大砂嵐の様子（重苦しい響きをもつ「p」の音の連続に注意した）。
In the morning the dust hung like a fog, and the sun was as red as ripe new blood. All day the dust sifted down from the sky, and the next day it sifted down. An even blanket covered the earth. It settled on the corn, piled up on the tops of the fence posts, piled up on the wires,...
- (4) キャロザースは、このように「死の瞬間」や「結果」が曖昧に表現されることが、短編作品にも頻繁にみられると述べ、「あの夕日」のナンシーのその後の生死が不明なことや、「脚」で実際に何が起ったのか曖昧であることなどはじめ、八例をあげている（二一九）。
- (5) モアランドは、貴族の館の玄関でそこに入るのを拒否されるサトペン少年の「プライマル・シーン（原体験）」が「納屋は燃える」や『村』に、単なる繰り返しではなく、「変更を加えて再現される」点に注目している。なお、『村』では、このシーンを語り手のラトリフがユーモラスに再現する。
- (6) 作品のタイトルの日本語訳は、アブの主体としての立場を強調した「納屋を焼く」（志村正雄・これは村上作品と同じタイトルになる）と、むしろサーティの観点から状況を見る「納屋は燃える」（大橋健三郎、小山敏夫、田中久男）の二通りがあっ

面白く同時に、テキストを読む難しさをしみじみ思わせつづけるという点がある。

参考文献

- Blekasten, Andre. *The Ink of Melancholy: Faulkner's Novels from "The Sound and the Fury" to "Light in August."* Indiana Univ. 1990.
- Carothers, James B. *William Faulkner's Short Stories.* UMI Research Press, 1985.
- Hiles, Jane. "Kinship and Heredity in Faulkner's "Barn Burning"'" *Mississippi Quarterly* Summer, 1985.
- Moreland, Richard C. *Faulkner and Modernism: Reading and Rewriting.* Univ. of Wisconsin P 1990.
- Steinbeck, John. *The Grapes of Wrath.* 1939.
- Towner, T heresa M. & Carothers, James B. *Reading Faulkner. Collected Stories.* Univ. Press of Mississippi, 2006.
- Waddington, Warwick. *As I Lay Dying: Stories out of Stories.* Twayne, 1992.
- Zender, Karl. *The Crossing of the Ways: William Faulkner, the South, and the Modern World.* Rutgers UP, 1989.
- 今村橋夫「フォークナーと村上春樹——『納屋を焼く』をめぐる冒険」『フォークナー』第6号、松柏社、2004、April.
- 加藤典弘『テキストから遠く離れて』講談社、二〇〇四。
- 坂井英行『村上春樹——分身との戯れ』朝林書房、二〇〇一。
- 佐野真一『響きと怒り…事件の風景・事故の死角』日本放送出版協会、二〇〇五。
- 三宅昭良『アメリカン・ファシズム—ロングとローズベルト』講談社、一九九七。
- 村上春樹『蜩。納屋を焼く。その他の短編』新潮文庫、一九八七。

(いけうち・まちなお 政治経済学部教授)